

マンガに見られる暴走族

—なぜ青少年は暴走族マンガに惹かれるのか?—

久保田 真功

The Reckless Motorcycle Riders in Japanese Comic Books
Why Do the Reckless Motorcycle Riders Comic Books Attract Youngsters?

Makoto Kubota

E-mail: makotok@edu.u-toyama.ac.jp

<要 約>

本研究の目的は、暴走族マンガの分析をもとに、マンガに見られる暴走族の下位文化を明らかにし、青少年が暴走族マンガに惹かれる理由について検討することにある。

分析を行った結果、①主要登場人物は、アイデンティティ獲得のツールとしてバイクを消費していること、②暴走族内には確固たる上下関係と、構成員が従うべき掟が存在すること、③主要登場人物の多くは暴走族引退後に社会復帰を果たしているとともに、現役の暴走族に教育的な働きかけをしていること、などが明らかとなった。

これらの結果を踏まえ、マンガに見られる暴走族が、ドリフト理論で知られる Matza の主張する非行少年像に類似していることを指摘した。そして、青少年は、暴走族の姿に Matza が言うところの「隠れた価値」(subterranean values)を見出すことによって、登場人物の姿に共感し、暴走族マンガを好んで読んでいるものと考察した。

キーワード：マンガ，暴走族，非行，社会学

keywords：japanese comic books, the reckless motorcycle riders, delinquency, sociology

1. 目的

今を遡ること10年ほど前(1999年)、広島県で毎年開催される「胡祭り」において暴走族と警官隊とが衝突した。その様子はテレビ等で大々的に報道された。また、日本の警察の活動取材したドキュメンタリー番組のなかで、警察による暴走族検挙活動は必ずといっていいほど取り上げられている。これらの報道を見ると、暴走族の活動はいまだに活発であるかのような印象を受けるが、実際には沈静化の一途をたどっている。警察庁の調査によると、平成20(2008)年末の暴走族構成員数は1万1,516人であり、昭和57(1982)年の4万2,510人のピーク時と比べると、約4分の1にまで減少している。また、グループの規模も縮小傾向にあり、10人以下のグループが全体の7割以上を占めている。

その一方で、暴走族を主人公としたマンガの人気は依然として高い。例えば、『週刊少年マガジン』(講談社)に連載されていた『疾風伝説 特攻の拓』(全27巻)の累積部数は、2900万部となっている⁽¹⁾。『湘南純愛組!』(全31巻)の累積部数については

定かではないが、その続編である『GTO』(全25巻)は累計5000万部を売り上げる⁽²⁾とともに、テレビドラマ化もされ、大きな話題にもなった。また、『ヤングキング』(少年画報社)に連載されていた『BAD BOYS』(全22巻)の累積部数は、2200万部となっている⁽³⁾。

先の警察庁の調査結果を踏まえると、暴走族マンガの影響から実際の暴走族に加入したり、新たに暴走族を立ち上げる青少年は極めて少ないと推察される。それではなぜ、青少年は暴走族マンガを好んで読むのであろうか。

本稿の目的は、暴走族マンガの分析をもとに、マンガに見られる暴走族の下位文化を明らかにし、青少年が暴走族マンガに惹かれる理由について検討することにある。あわせて、暴走族マンガが青少年に及ぼす影響についても若干の考察を試みたい。

具体的に分析を行うのは、次の4つである。第1に、主要登場人物が乗っているバイクである。当然のことながら、バイクがないと集団暴走を行うことはできない。それゆえ、暴走族にとってバイクは重

要不可欠なアイテムである。ここでの検討課題は、マンガに見られる暴走族にとってバイクはどのような意味を持っているのか、ということである。

第2に、暴力シーンである。暴走族マンガといった場合、多くの人は逸脱的なシーンを想起するであろう。事実、暴走族マンガの登場人物は、暴力や集団暴走行為、窃盗、薬物使用などの数々の逸脱行為に着手している。なかでも群を抜いて多いのは、暴力シーンの描写である。また、暴力シーンの描写で注目すべきは、喧嘩の際にしばしば道具が使用される、ということである。ここでの検討課題は、道具を使用するのは果たしてどういった人物なのか、ということである。

第3に、暴走族内の階層と掟である。ここでの検討課題は、暴走族はどういった階層的秩序に基づいた組織であり、また、暴走族内の掟にはどういったものがあるのか、ということである。

第4に、主要登場人物の暴走族引退後である。ここでの検討課題は、マンガに見られる暴走族は引退後も逸脱的なのか、ということである。

分析資料は、以下の通りである。

佐木飛朗斗(原作)・所十三(漫画) 1991、『疾風伝説 特攻の拓』(全27巻)、講談社。

田中宏 1989、『BAD BOYS』(全22巻)、少年画報社。

田中宏 1997、『BAD BOYS グレアー』(全16巻)、少年画報社。

藤沢とおる 1991、『湘南純愛組!』(全31巻)、講談社。

藤沢とおる 1997、『GTO』(全25巻)、講談社。

分析資料の選定基準は、次の2つである。第1に、累積部数が多いことである。累積部数の多さは、作品の人気の高さを端的に現わしていると言える。本稿の目的は、青少年が暴走族マンガに惹かれる理由について検討することにあるため、人気の高い作品を分析資料として用いる必要がある。

第2に、続編がある、ということである。本稿では、主要登場人物の暴走族引退後について分析を行う。この点については続編で描かれることが多いため、続編がある作品を分析資料として用いることとした。なお、続編がある作品は、田中宏と藤沢とおるの作品である。

これらの分析を通じて見えてくる暴走族の姿とは

一体どのようなものなのであろうか。また、青少年は暴走族マンガのこういった点に魅力を感じていると言えるのであろうか。さらには、暴走族マンガは青少年にどのような影響を及ぼしていると考えられるのであろうか。

2. 主要登場人物が乗っているバイクに関する分析 一旧車を好む暴走族一

表1は、『疾風伝説 特攻の拓』の主要登場人物が乗っているバイクの概要を示したものである⁽⁴⁾。この表より、登場人物の乗っているバイクの発売年が全体的に古いことがわかる。

図1は、『疾風伝説 特攻の拓』の主要登場人物が乗っているバイクの発売年別台数を示したものである。これを見ると、1990年代に発売されたバイクは1台のみであり、他は1980年代以前に発売されていることがわかる。また、1970年代以前に発売されたバイクは27台中16台であり、全体の半数以上を占めている。

このように登場人物が旧車に乗る傾向は、なにも『疾風伝説 特攻の拓』に限ったことではない。『BAD BOYS』に登場する人物も、一様に旧車に乗っている。主人公の桐木司は、当初は先代から譲り受けた「CBX400F」(1981年に発売)に乗っていたが、その後「伝説の単車」と呼ばれる「Z400FX」(1979年に発売)に乗り換える。桐木司と同じチームに所属しているバイク好きの岩見エイジは、「XJ400」(1980年に発売)という旧車に乗っている。さらに、『湘南純愛組!』の主人公である鬼塚英吉と弾間龍二は、それぞれ「Z750RS(通称ZII)」(1973年に発売)と「CBX400F」という旧車に乗っている。

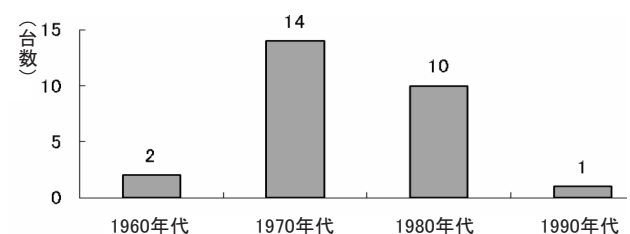


図1 発売年別台数

登場人物の旧車に対するこだわりは、作品中の様々な場面で見られる。例えば、『疾風伝説 特攻の拓』には、仲間を助けるためにバイクを失った主人公のバイクを皆で組み上げる場面がある。その際、仲間

表1 『特攻の拓』 主要登場人物のバイク

チーム名	名前	バイク				
		名称	製造元	発売元	新車価格	中古車価格
阿修羅王 (アシュラオウ)	八尋渉	CB400FOUR	ホンダ	1974	327,000	600,000～ 980,000
鬼雷党 (キライトウ)	広瀬敬司	GSXR400R	スズキ	1991	739,000	—
外道 (ゲドウ)	鳴神秀人	Z400FX	カワサキ	1979	385,000	590,000～ 1,000,000
	吉岡義郎	GT380	スズキ	1972	245,000	380,000～ 790,000
極悪蝶 (ゴクアクチョウ)	慈統享介	CB750F	ホンダ	1979	538,000	180,000～ 650,000
	柁那智	CBX400F	ホンダ	1981	485,000	600,000～ 1,200,000
	来栖奈緒巳(元)	500SS	カワサキ	1969	298,000	620,000～ 1,570,000
女郎蜘蛛 (ジョウグモ)	那森倫子	Z400GP	カワサキ	1982	478,000	300,000～ 700,000
爆音小僧 (バクオンコゾウ)	鮎川真里	CB400FOUR	ホンダ	1974	327,000	600,000～ 980,000
	真嶋秋生	KH400	カワサキ	1976	300,000	450,000～ 730,000
	姫小路良	GS400E	スズキ	1978	340,000	360,000～ 1,050,000
	カズ	FZR400RR	ヤマハ	1989	739,000	—
	ミツオ	CB400TホークII	ホンダ	1977	319,000	—
	滝沢ジュンジ	CBX400F	ホンダ	1981	485,000	600,000～ 1,200,000
	タカノリ	KH400	カワサキ	1976	300,000	450,000～ 730,000
	真嶋夏生(元)	CB1100R	ホンダ	1981	輸出車(日本円で 300万円程度)	1,360,000～ 1,680,000
	半村誠(元)	CB400FOUR	ホンダ	1974	327,000	600,000～ 980,000
猊羅天 (バクラテン)	沢渡弘志(元)	Z750FOUR	カワサキ	1976	485,000	750,000～ 2,000,000
	天羽時貞(元)	SR400	ヤマハ	1978	310,000	—
	那森須王(元)	CB750FOUR	ホンダ	1969	385,000	480,000～ 2,800,000
美麗 (ビレイ)	一色大珠	RD400	ヤマハ	1979	370,000	—
魍魎 (モウリョウ)	一条武丸	GSX400FS	スズキ	1982	528,000	—
夜叉神 (ヤシャガミ)	鰐淵春樹	Z1000J	カワサキ	1981	輸出車(日本円で 50万円程度)	—
	鎖島直	CBR400F	ホンダ	1983	539,000	240,000～ 430,000
	内海雄太	VFR400R	ホンダ	1986	659,000	130,000～ 200,000
朧童幽霊 (ロードスペクター)	榊龍也	GPZ900R	カワサキ	1984	輸出車(日本円で 70万円程度)	250,000～ 750,000
麓沙亜鶴 (ロクサーヌ)	緋咲薫	Z400FX	カワサキ	1979	385,000	590,000～ 1,000,000

のそれぞれはバイクについて強いこだわりがあることから、どのメーカーのバイクを組み上げるかで激しい口論となる。そこで、主人公が皆をなだめようとして、「そんなことくらいで熱くならなくても」と言ったところ、皆から激しい反発にあうのである(第4巻第23話<マンガのコマを参照>)。



また、登場人物は旧車に乗るにあたり、必ずと言っていいほど何らかの改造をほどこしている。この点については、とりわけ『疾風伝説 特攻の拓』に詳しい⁽⁵⁾ので、紹介したい。表2は、主要登場人物

表2 バイクの改造箇所

掲載巻	名前	車種	主な改造点
4巻	鳴神 秀人	Z400FX	マフラー交換 シート(あんこ抜き)加工 エンジンの改造(排気量アップ) 塗装
5巻	榊 龍也	GPZ900R	デビル社製集合管(マフラー) シート交換(3段シート) エンジンの改造 塗装
6巻	浅川 拓	ゼファー	マフラー交換 シート交換(シングルシート) エンジンの改造(排気量アップ) サスペンションの交換 塗装
8巻	佐伯 弘志	Z750F DII	マフラー交換 シート交換(3段シート) エンジンの改造(排気量アップ) キャブレターの交換 サスペンションの交換 塗装 ホーンの追加 など。
9巻	真嶋 秋生	KH400	マフラー(チャンバー)交換 エンジンの改造 テールカウルの交換 など。
10巻	姫小路 良	GS400E	マフラーをカット シート交換(3段シート) テールカウルの交換
11巻	一条 武丸	GSX400FS	マフラー交換 シート交換(3段シート) ロケットカウルの取り付け テールカウルの交換 塗装

が乗っているバイクの改造箇所を示したものである。これを見ると、改造点は吸気系(キャブレター)・排気系(マフラー)からエンジン、サスペンション、外装など多岐に及んでいることがわかる。注目すべきは、すべてのバイクでマフラーに手が加えられていることである。マフラーを社外品に交換した場合、あるいはマフラーから音量を抑えるためのサイレンサーを取り払った場合、外観だけではなく音量や音質が大きく変化する。彼らがマフラーに手を加えることを改造の基本としているのは、「音」を暴走行為を盛り上げる上で必要不可欠のアイテムとしてとらえているからである。

さらに、彼らが乗っている旧車は、いずれも今現在において「名車」と称されるバイクである。絶版車を特集した雑誌を見ても、彼らの乗っているバイクは多くの紙面を割いて紹介されている。作品の枠を超えて登場頻度が高いバイクとしては、「CB400 FOUR」(ホンダ)、「CBX400F」(ホンダ)、「Z400 FX」(カワサキ)、「Z750RS・Z750FOUR」(カワサキ)があげられる。以下、それぞれについて簡単に紹介したい⁽⁶⁾。

(1)「CB400FOUR」(ホンダ)

1974年12月にホンダが発売開始。当初、排気量は408CCであったが、新たに設けられた中型二輪免許制度に対応するために、1976年に398CCへとスケールダウンされた。「CB400FOUR」の最たる特徴は、4気筒エンジン⁽⁷⁾を搭載したことにある。当時、4気筒エンジンが400CCクラスの中型車に搭載されることはなかったため、「CB400FOUR」の登場は、とても画期的なことであった。欧州のカフェレーサー風のスタイルを採用していたこともあり、「ヨンフォア」の愛称で高い人気を集めた。

(2)「CBX400F」(ホンダ)

1981年11月にホンダが発売開始。1970年代末に、カワサキ、ヤマハ、スズキの3メーカーから、4気筒エンジンを搭載した中型バイク(400CC)が発売された。ホンダは「CB400FOUR」以降、4気筒エンジンを搭載した中型バイクを発売していなかったため、ホンダのバイクを望むユーザーは多かった。このような状況のなか、「CBX400F」が発売された。「CBX400F」は、48ps(馬力)の最高出力を弾きだし他メーカーのライバル社を上回るとともに、

当時最新の技術を装備していた。

(3) 「Z400FX」(カワサキ)

1979年4月にカワサキが発売開始。その最たる特徴は、次の2点である。1つは、中型バイク初となるDOHC(ダブル・オーバー・ヘッド・カムシャフト)エンジンを搭載していたことである。DOHCとは、「吸気用と排気用それぞれ1本ずつシリンダーヘッドにカムシャフトを持つ形式」(米山 2005, 15頁)のことであり、従来の中型バイクが搭載していたSOHCエンジンと比べ、高回転、高出力が可能となる。

もう1つの特徴は、車体が大柄であったことである。「Z400FX」は、輸出用であった「Z500」の排気量を小さくしたモデルであり、「Z500」とエンジン以外は共通であった。それゆえ、他のメーカーの中型車と比べた場合、車体は一回りほど大きかった。1975年に免許制度が改正され、大型バイクに乗ることが困難であった当時、大型バイクに憧れるユーザーにとって大柄な車体は大きな魅力であった。

(4) 「Z750RS・Z750FOUR」(カワサキ)

1973年3月にカワサキが発売開始。型式名は「ZII」であり、輸出用の「Z1」をベースに排気量を小さくした国内販売用のモデルである。排気量は「ZII」が746CCに対し、「Z1」は903CCである。当時、日本には排気量の自主規制があり、排気量は750CC未満とされていた。

「ZII」のベース車両である「Z1」は、ホンダから発売された「CB750FOUR」(1969年9月販売)をすべてにおいて上回ることを目的として開発された。動力性能、操縦安定性、コーナリング性能に優れていたことに加え、初めてテールカウルを採用した流麗なデザインにより、輸出開始と同時に世界のバイク市場を席卷した。「ZII」は「Z1」のスケールダウンモデルとはいえ、随所に専用設計がなされており「Z1」に匹敵する高性能を発揮したため、日本でも大ヒットとなった。

以上、4台のバイクについて簡単に紹介したが、いずれもエポックメイキングなバイクであったことが理解されたであろう。これらは「名車」と呼ばれ、今現在でも人気が高い。旧車の特集した雑誌を見ても、これら4台についてはとりわけ大きく取り上

げられている。

最後に、登場人物が乗っているバイクの製造元について確認しておきたい。図2は、『疾風伝説 特攻の拓』の主要登場人物が乗っているバイクの製造元別台数を示したものである。これを見ると、ホンダ製のバイクとカワサキ製のバイクに乗っている者が多いことがわかる。ホンダとカワサキは、バイク業界における2大ブランドである。とりわけカワサキのバイクは、「男のカワサキ」と称されるように硬派のイメージが強く、タンクなどの角ばったデザインが人気である。「男のカワサキ」という表現は、マンガのなかでもしばしば登場する(『特攻の拓』第4巻第23話、『湘南純愛組!』第20巻178話など)。

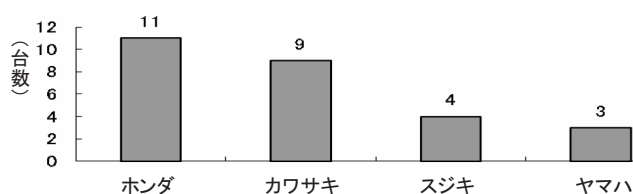


図2 製造元別台数

以上を踏まえて、マンガに見られる暴走族にとってのバイクの意味について考えてみたい。彼らはいわゆる「名車」と評されるバイクを好むとともに、バイクの製造会社が有するイメージを強く意識している。つまり、彼らは所有しているバイクが象徴しているもの(「名車」であれば「歴史に名を残すもの」, 「カワサキ」であれば「男らしさ」など)に対して大きなこだわりを持っていると言えよう。とりわけ彼らは「歴史に名を残すもの」に対して強い憧憬の念を抱いており、このことはマンガのなかにも如実に現れている。暴走族マンガのなかには、必ずといっていいほど「伝説化された人物」が存在する。「伝説化された人物」は、喧嘩が強い者、バイクの運転が巧みである者、周囲からの人望が厚い者として描かれることが多い。また、事故等によって死亡しているケースが多いということも大きな特徴である(『特攻の拓』の半村誠や『湘南純愛組!』の真樹京介、『BAD BOYS』の村越宏明など)。

これらのことを考えあわせてみると、マンガに見られる暴走族は、自らのアイデンティティ獲得のツールとしてバイクを消費していると言えるのではないだろうか。すでにある特定のイメージが確立されているバイクに乗ることは、「歴史に名を残す存在」

や「男らしい存在」でありたいという思いの現れであると考えられるからである。

3. 暴力シーンに関する分析

暴走族マンガには様々な逸脱的なシーンが登場するが、暴力シーンはいずれの作品を見ても最も多く描かれている。例えば、『疾風伝説 特攻の拓』を見ると、ほぼすべての話に暴力シーンが登場する。暴走族による暴力の対象は、対立する暴走族、警察、在日米軍のMP、一般人と多岐に渡る。このうち最も多いのは、暴走族同士の喧嘩である。特徴的なのは、喧嘩の際に様々な道具が使われることである。使用頻度の高い道具は、木刀、鉄パイプ、ナイフであるが、ツルハシやバール、ハンマー、スパナといった工具も多く用いられている。

このように、喧嘩の際に道具が使用されるのは、『疾風伝説 特攻の拓』に限ったことではない。『湘南純愛組!』でも喧嘩の道具として木刀や鉄パイプ、バット、ナイフなどが用いられ、なかにはバイクで引き回したり、車をぶついたりすることもある。また、『BAD BOYS』では他の作品と比べ、喧嘩の際に道具が使用される頻度が少ないものの、木刀やナイフ、バットなどが用いられることがある。

それではどういった登場人物が喧嘩の際に道具を使用するのであろうか。この点について考えるにあたり、喧嘩が強いとされる登場人物には大別して2つのタイプがあることを理解する必要がある。1つは、ずば抜けた腕力を持つ「腕っ節の強いタイプ」である。このタイプに該当する登場人物としては、『疾風伝説 特攻の拓』では鮎川真里（「爆音小僧」の頭）や鳴神秀人（「外道」の頭）、榊龍也（「臙童幽霊（ロードスペクター）」の頭）などが、『湘南純愛組!』では鬼塚英吉（以下、鬼塚）や弾間龍二（以下、弾間）などが、『BAD BOYS』では段野秀典（「陣威稟斗（ビイスト）」の頭）などがある。このような「腕っ節の強いタイプ」は作品の主人公に多く見られ、喧嘩の際には素手を用いることが多い。また、周囲からの人望が厚い人物として描かれることが多い。

もう1つのタイプは、何をするかわからない「こわいタイプ」である。「こわさ」は、作品によっては「アブナサさ」とも言われる。このタイプに該当する登場人物としては、『疾風伝説 特攻の拓』では一条武丸（「魍魎」の頭）などが、『湘南純愛組!』

では阿久津淳也（「暴走天使」の頭）などが、『BAD BOYS』では佐々木俊明（「廣島連合」の頭）などがある。このような「こわいタイプ」は、作品の主人公のライバルであることが多く、喧嘩に勝つためには手段を選ばない。

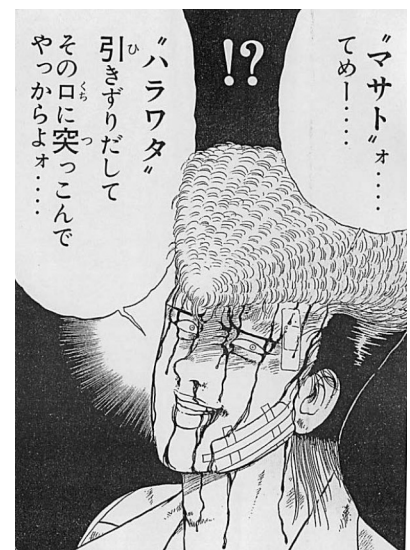
「腕っ節の強いタイプ」についてはあらためて説明する必要はないが、「こわいタイプ」についてはより詳しく説明する必要がある。そこで、以下では先にあげた「こわいタイプ」に属する登場人物について紹介したい。

(1) 一条武丸

『疾風伝説 特攻の拓』に登場する人物であり、「魍魎」の頭である。主人公の拓が親しくしている鮎川真里（以下、真里）とライバル関係にある。一条武丸（以下、武丸）は敵対するチームの人間からも恐れられており、武丸が登校した際、多くの者が彼から目をそらしている。目があうと何をされるかわからないからである（4巻第25話）。また、「爆音小僧」の幹部である真嶋秋生は、武丸の理屈抜きの「こわさ」について「“怖ェーんだよ “武丸”ァ…… “技術”だ “気合い”だゆー問題じゃねーんだよ……」（4巻第29話）と語っている。

武丸の「こわさ」が最も端的にうかがえるのは喧嘩のシーンである。榊龍也（以下、龍也）との喧嘩の際には、一時は気を失い龍也に負けたように見えたものの、その後白目がむき出しとなり攻撃力が倍増する。この状態を「魍魎」の幹部は“キレた”と呼び、龍也に負けを宣告している（4巻第30話）。

さらに、真里との喧嘩の際にはツルハシを振り回し、真里の攻撃を受けたことにより一旦は気を失うものの、“キレた”状態となり再び攻撃を開始する。その後、コンテナに跳ねられ、運転手は武丸を完全に殺してしまったと思ったものの、武丸は再び起き上がり救急隊員を驚かせるとともに、真里に対



して「マサト」ォ……てめー……“ハラワタ”引きずりだしてその口に突っこんでやるからよォ……」と暴言を吐く（6巻第46話<マンガのコマを参照>）。

(2) 阿久津淳也

『湘南純愛組!』に登場する人物であり、「暴走天使」の2代目頭である。阿久津淳也（以下、阿久津）は、初代頭の真樹京介から引き継いだ「暴走天使」を構成員400人以上の巨大なチームにし、神奈川県内で「最強最悪の武闘派族」と呼ばれるほど有名にした（11巻第95話）。

阿久津は「危ない奴」としても有名であり、ある女子高生（長瀬渚、以下、渚）を監禁して乱暴を働いたりもしている。渚はショックのあまりその時の記憶を失くすとともに、自己防衛のために「夜叉」という別人格をつくりあげる。「夜叉」は阿久津の彼女として振る舞い、阿久津のためであれば死すら恐れない（12巻第105話）。

また、阿久津は喧嘩の際に道具を使うことを全く厭わない。ナイフで刺したり（13巻第115話、14巻第119話<マンガのコマを参照>、第124話）、チェーンで顔を殴ったり（14巻第118話）もする。さらには、ガソリンをまいて人を焼き殺そうとしたこともあり（14巻第119話）、主人公鬼塚との喧嘩で追い込まれた際には警察官から奪った拳銃で鬼塚を殺そうとしている（15巻第127話）。



(3) 佐々木俊明

『BAD BOYS』に登場する人物であり、「伝説」となっている「廣島連合」を復活させる。佐々木俊明（以下、佐々木）は、主人公桐木司（以下、司）と初めて出会った際に、前触れもなく標識のコンクリートの部分で殴りかかる。この光景を見た司と同じチームの川中陽二は、「コイツ…狂うとる……!!

シャレんならんでっ」とつぶやく（15巻第106話）。

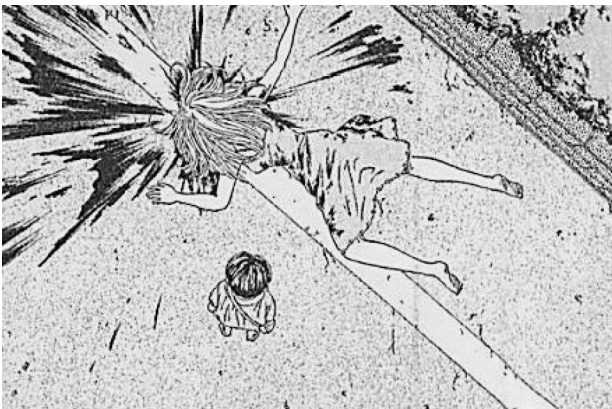
また、佐々木は喧嘩の際に、大笑いしながら相手をカッターナイフで切り刻んだり（16巻第112話<マンガのコマを参照>）、バットで何度も相手を殴った上にナイフで刺したり（16巻第115話）、大型トラックで相手を跳ねたりもしている（15巻第106話）。さらに、自分に歯向かったチーム内の人間3人をカッターナイフで切り刻んで殺している（15巻110話）。



先に紹介した3人は腕力にもすぐれているため、素手の喧嘩でも強い。それにもかかわらず、彼らが道具を使うのはなぜなのだろうか。この点について考えるにあたり、『湘南純愛組!』に登場する阿久津の次のような発言がヒントとなるであろう。阿久津は、高田（2代目「暴走天使」の幹部）から「鬼塚や弾間はお前以上にマトモじゃない」と挑発された際、「だったらどっちがキレてっかくらべっこしねーとよ」と述べた後に、高田の足をナイフで刺すとともに“自分は人殺しでもやる”と語っている（13巻115話）。このようなくだりからうかがえるのは、「こわい」タイプの登場人物が「こわさ」を意図的に演出している、ということである。このことは、『BAD BOYS』に登場する佐々木の考えにより明確に現れている。佐々木はバットで司を殴りながら、頭のなかで「一番強いといわれる男よりも…誰もが一番アブナイといわれる男に恐怖を感じるじゃろォ…」（16巻第114話）と考えている。つまりは、「こわいタイプ」の登場人物の目的は恐怖を与えることによって周囲の者たちに完全な服従を強いることにあり、このような目的のもと意識的に「こわさ」を演出していると言えるだろう。

作品によっては「こわい」タイプの登場人物の過去についても触れている。例えば『BAD BOYS』

では、佐々木の過去の記憶が描写されている。佐々木が幼稚園に通っていたころ、佐々木の母親は夫以外の男性と不倫していた。母親は不倫相手の男から“夫を殺して、得られた保険金で一緒に暮らそう”と言われたことを真に受け、夫を殺害する。母親が不倫相手に夫を殺害したことを伝え、不倫相手は“本気にするとは思わなかった”と言い、母親を突き放す。ショックを受けた母親は、ビルの上から飛び降りて自殺をする。当時幼稚園児であった佐々木はその現場を目にし、狂気に目覚める（17巻第128話〈マンガのコマを参照〉）。



また、『湘南純愛組！』でも、阿久津の過去の記憶が描写されている。阿久津は、母親から再婚相手を紹介されたことにショックを受ける。ちょうどそのころ、真樹（「暴走天使」初代総長）と出会い、真樹に対して強い憧れを抱く（14巻第125話）。その後、阿久津は「暴走天使」の2代目を引き継ぐこととなるが、“真樹に追いつきたい、真樹に認められたい”，という思いから、無茶な行動を繰り返すこととなる。

これらの描写の背景にあるのは、“生まれながらの悪”というものは存在せず、家庭環境に恵まれていないなどの理由から人は道を誤っていく”という、いわば環境決定論的な考えであると言えよう⁽⁸⁾。

4. 暴走族内の階層と掟に関する分析

暴走族マンガを見ると、一口に暴走族といってもチーム内に明らかな階層があることがわかる。表3は、『疾風伝説 特攻の拓』に登場するチームの階層を示したものである。最も階層が高いのは、「頭（アタマ）」と呼ばれる者である。「頭」は、チームによっては「総長」「統領」「会長」などと呼ばれる。次いで階層が高いのは、「特攻隊長」や「親衛隊長」

と呼ばれる者であり、彼らはチーム内で幹部として位置づけられている。3番目に階層が高いのは、「特攻隊」や「親衛隊」に属する者であり、以上紹介した役職のいずれにも属さない者は「兵隊」と呼ばれ、最も階層が低い。このようなチーム内の階層は『疾風伝説 特攻の拓』にのみ存在するのではなく、『湘南純愛組！』や『BAD BOYS』にも存在する。

表3 チーム内の階層

チーム名	役職名	氏名
爆音小僧	頭	鮎川真里
	特攻隊長	真嶋秋生
魍魎	統領	一条武丸
	特別遊撃隊長	新開英二
	親衛隊長	久保島剛
麓沙亜鶴	頭	緋咲薫
	特攻隊長	土屋
	親衛隊長	相賀

また、チーム内の階層により、特攻服（暴走族が暴走を行う際に着用する制服のようなもの）の形や特攻服に施されている刺繍も異なる。形については、「頭」と呼ばれる者が得てして丈の長い上着を着ていることが多いのに対し、それ以外の者は丈の短い上着を着ていることが多い。刺繍については、幹部と呼ばれる者がチーム名の他に役職名を明記していることが多いのに対し、「兵隊」と呼ばれる者はチーム名のみであることが多い。

チーム内での階層は絶対的なものであり、下の階層に位置づく者が上の階層の者に対して異議を申し立てることは許されない。階層の絶対性は、チーム内での呼び名にも現れている。例えば、「爆音小僧」は高校1年生から成るチームであり、「頭」の名前は「真里（マサト）」であるが、彼を「マー坊」と呼べるのは特攻隊長の秋生のみである。それ以外のメンバーは「マー坊くん」と呼んでいる。同様に、「隴童幽霊」は高校2年生から成るチームであり、「頭」の名前は「龍也」であるが、彼を「龍也」と呼び捨てにする者は1人もおらず、みな「龍也くん」と呼んでいる。

なお、暴走族における階層は、チーム内だけではなくチーム間にも存在する。例えば、『疾風伝説 特攻の拓』を見ると、「爆音小僧」のメンバーが「鬼雷党（キライトウ）」のメンバーを明らかに格下に見ている様子が見え（2巻第9話）。また、

「爆音小僧」が集団暴走行為をしていた際、前を走行していた「魔覇裸邪（マハラジャ）」は「爆音小僧」に気づき、道を譲っている（3巻第19話）。『BAD BOYS』を見てもチーム間の階層は歴然としており、「陣威策斗」、「極楽蝶」、「広島 NIGHTS」の3チームが「広島トップ3」と称されている。

一方、暴走族マンガを見ると、チーム内に掟が存在することがうかがえる。例えば、『疾風伝説 特攻の拓』には、次のようなシーンがある。「爆音小僧」の集会のシーンである。メンバーの数人がシンナーを吸っており、主人公の拓にも吸うように誘う。拓はそれを「友達になる儀式」だと考え、シンナーを吸おうとしたところ、「頭」である真里が現れる。真里は拓にシンナーを勧めた2人をボコボコに痛めつけながら、「今まで“アンパン”で死んだやつ見てきたろおがぁ!! 死んで焼かれたって“骨”も残んねえんだ! それとも事故って仲間ァ巻き添えにしてーのかよ!」と叫ぶ（3巻第15話〈マンガのコマを参照〉）。痛めつけられた2人は、泣きながら真里に謝る。このシーンから、「爆音小僧」には“シンナーを吸うことは絶対に許されない”という掟があることがうかがえる。



同様の掟は、他のチームにも認められる。「麓沙垂鶴（ロクサアヌ）」の「頭」である緋咲は、緋咲に殴られるのを恐れて彼の機嫌をとろうとした人物から薬物を差し出された際、その人物を殴った後に「ナメてんのかよ……? 「麓沙垂鶴」は“こーゆーモン”は“厳禁”なんだよ“くされノーミソ”ヤロー……」(7巻第55話)と放言し、差し出された薬物を足で踏みにじっている。

また、『疾風伝説 特攻の拓』に見られる他の掟としては、“やられたら必ずやり返す”というもの

がある。例えば、「魍魎」の「頭」である武丸は、幹部の2人が「朧童幽霊」の「頭」である龍也に痛めつけられたことを知り、その2人をイスで殴る。その後、2人に対して“行く”っかねーだろ? “無敵”の“魍魎”を“払い戻し”によー”(4巻第28話)と言ひ、龍也に喧嘩を挑んでいる。また、「爆音小僧」の「頭」である真里は、仲間が「魍魎」のメンバーに意識がなくなるまで痛めつけられたことに激昂し、「魍魎」の「頭」である武丸に単身で闘いを挑む。“やられたら必ずやり返す”という掟の背景には、仲間を大切に思う気持ちだけでなく、“やられたままではチームの格が下がる”という意識がある。このことは、先の武丸の言葉からもうかがえる。

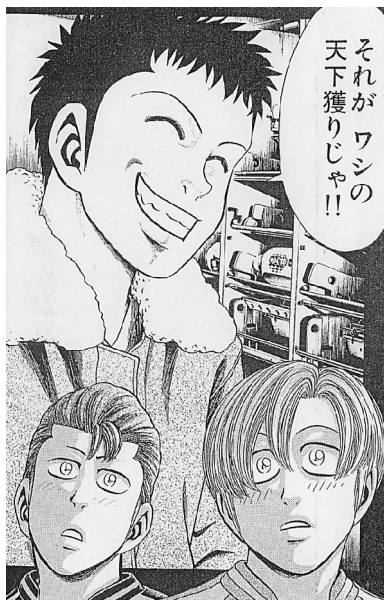
このようなチーム内での掟は、『BAD BOYS』にも見受けられる。『極楽蝶』の幹部である川中陽二（以下、陽二）は、アルバイトからの帰り道、嶋のぼる（以下、嶋）からチームに入れてくれと頼まれる。当初困っていた陽二ではあったが、嶋がアルバイトでお世話になっているおばさんの息子であることを知り、嶋をチームに入れることに前向きとなる。しかし、嶋の家を招かれた際に、嶋が母親に暴力を振っていたことを知り、激昂して嶋を殴りつける。その後、陽二は嶋に対し、「人の痛みのわからんヤツは…ほんまの強い男にはなれん…ワレに…極楽蝶に入る資格なんか…ない……」と告げる（10巻第68話〈マンガのコマを参照〉）。陽二のこの発言から、チームに入る資格としては、喧嘩の強さだけではなく、人の痛みのわかる優しさが求められることがうかがえる。



5. 主要登場人物の暴走族引退後

『疾風伝説 特攻の拓』には続編が存在しないため、登場人物の暴走族引退後についてはうかがい知ることができない。しかし、『湘南純愛組!』や『BAD BOYS』には続編があり、登場人物のその後を垣間見ることができる。『湘南純愛組!』の続編は『GTO』という作品であり、『BAD BOYS』の続編は『BAD BOYS グレアー』という作品である。このうち『GTO』は『湘南純愛組!』の主人公であった鬼塚のその後をテーマとしたものであり、暴走族引退後に大学に入学して教師となった鬼塚の破天荒な教師生活を描いている。『GTO』には鬼塚以外の登場人物のその後も描かれている。例えば、鬼塚とコンビを組んでいた弾間は、専門学校に入学して整備士の資格を取得し、バイク屋を営んでいる。また、かつて「鎌倉の狂犬」と恐れられていた冴島は警察官となっている。

一方、『BAD BOYS グレアー』(以下、『グレアー』)を見てみると、かつて「極楽蝶」の「頭」であった司は暴走族を引退した後に酒屋で働いている。「極楽蝶」の幹部であった川中陽二、中村寿雄、岩見エイジの3名については、それぞれお好み焼屋、花屋、バイク屋で働いている。注目すべきは、彼ら4人がそれぞれが『グレアー』に登場する不良少年たちにかつての自分を重ね、不良少年たちを育てようとしていることである。例えば、酒屋となった司は、2人の不良少年に対して今現在の自分の夢を語り、自分なりの夢や目標を持つことの大切さを説いている。そして、2人の不良少年は、司の話に胸をときめかす(16巻第109話<マンガのコマを参照>)。



6. なぜ青少年は暴走族マンガに惹かれるのか?

ここでは、これまで行ってきた分析の結果を踏まえ、青少年が暴走族マンガに惹かれる理由について検討するとともに、暴走族マンガが青少年に及ぼす影響について若干の考察を試みたい。

第1に、主要登場人物はアイディンティティ獲得のツールとしてバイクを消費している、ということが明らかとなった。

第2に、暴走族には確固たる上下関係があるとともに、暴走族内には①違法薬物の禁止、②やられたらやり返す、③人の痛みが分かることをチームに入るための資格として課す、という掟が見られた。

第3に、主要登場人物の多くは暴走族引退後に社会復帰を果たしているとともに、現役の暴走族に教育的な働きかけをしていた。つまり、彼らは更生しているのである。

主要登場人物が更生していく上で暴走族内の上下関係が重要な役割を果たしている、ということにも着目したい。このような上下関係があるために、現役の暴走族のメンバーは更生した先輩の言うことを素直に聞き入れることができ、彼らの社会復帰の道も開かれていくのである。これとよく似たことは、大山(2009)の論文からもうかがえる。大山は茨城県のある暴走族を対象としたフィールドワークをもとに、暴走族の下位文化が継承されるプロセスについて検討している。そこで明らかとなったのは、暴走族内に厳密な上下関係があることによって、逸脱的な下位文化が伝承されるだけでなく、逸脱的な下位文化からのスムーズな離脱が可能となる、ということである。暴走族の社会復帰をうながす上での暴走族OBの役割は、主に次の2つである。1つは、地元で定職に就き家庭をもっているOBの姿を見ることによって、現役のメンバーは暴走族引退後の将来の自分の姿を見てとることができる、ということである。もう1つは、年長の暴走族OBが地元社会と現役のメンバーとの媒介となることによって、現役のメンバーは引退後に地域社会に包摂されることが可能となる、ということである。このように、マンガに描かれる暴走族と実際の暴走族との間に類似点が見られるということは、とても興味深い。

これらの分析結果からうかがえる暴走族の姿は、ドリフト理論で知られるMatzaが主張する非行少年像とよく似ている。Matzaは、従来の逸脱理論

が想定していた非行少年像（法に従う少年とは根本的に異なった存在）に疑問を呈する。例えば Matza (1961) は、ある論文のなかで、非行少年の価値と有閑階級の価値との類似性を指摘している。Matza によれば、有閑階級が提示する価値は、“大胆さや冒険的行為の強調”，“労働における規律の拒絶”，“贅沢や人目を意識した浪費の嗜好”，“力を通じて証明される男らしさに払われる尊敬”の4つである。Matza によれば、これら4つの価値は多くの人々によって認識されるとともに受け入れられている「隠れた価値」(subterranean values) である。このことを踏まえ、Matza は、非行少年は「非行者または順法的な人間のいずれか一方に深入りしているわけではない」(p.39) と主張し、従来の非行少年像とは異なる新たな非行少年像を提起するのである。

以上のような非行少年像を提起するにあたり、Matza (1964) が着目するのは、非行少年の大半が成人になると非行から足を洗うという事実である。Matza によれば、非行少年の更生は矯正機関の援助などによるものではなく、成熟によるものである。この点に着目した Matza は、非行少年は犯罪的世界にどっぷりと浸かっているわけではなく、「犯罪的世界」と「慣習的世界」との間を漂流 (drift) していると考えた。このような漂流状況のなか、非行少年は自らの犯罪行為を「中和の技術」(techniques of neutralization) を用いて正当化することにより、犯罪行為に着手するのである (Sykes and Matza 1957)。

Matza の主張する非行少年像と同様に、マンガに見られる主要登場人物も絶えず逸脱的行為に着手しているわけではない。例えば、集団暴走はしばしば他チームとの乱闘騒ぎを引き起こすが、いつも行われているわけではなく、主に土曜日ないしは日曜日の夜に限定されている。集団暴走以外の日は、仲間同士で楽しく語り合ったり、アルバイトに励んだりする様子などが描写されている。また、暴走族を引退した後は、家庭や職を持ち、社会復帰を果たしている。

以上のことを踏まえると、暴走族マンガの読者は、マンガに見られる暴走族の姿に Matza が言うところの「隠れた価値」を見出すことによって、登場人物の姿に共感し、暴走族マンガを好んで読んでいたと言えるのではないだろうか。「腕っ節の強いタイプ」の登場人物は、“大胆さや冒険的行為の強調”

や“力を通じて証明される男らしさに払われる尊敬”という「隠れた価値」を体現する存在として描かれているからである。

また、暴走族内に見られた、“違法薬物の禁止”や“人の痛みが分かることをチームに入るための資格として課す”，といった掟、さらには、暴走族引退後に社会復帰を果たし、現役の暴走族に教育的働きかけをする登場人物の姿は、彼らが逸脱的側面のみならず順法的側面をも兼ね備えた存在であることを端的に物語っていると見えよう。これらのことも、読者にマンガに見られる暴走族への共感を促す機能を担っていると推察される。

このようなマンガに見られる暴走族の姿は、青少年に次のような影響を及ぼしていると考えられる。第1に、身近な非行少年への理解を促す、ということである。大久保ら (2006) は、中学生を対象とした質問紙調査をもとに、“問題行動の経験が多い生徒が学級内で排斥されているわけではないこと”，“問題行動を起こす生徒が受容されている学級ほど、不良少年に対して否定的な感情を抱いていないこと”などを明らかにしている。このように、いわゆる「不良少年」が現在の子どもたちの間である程度受け入れられていることは、不良少年を主人公としたマンガが青少年の間で広く読まれていることと決して無関係ではないであろう。マンガに見られる不良少年は「隠れた価値」を体現してくれる憧れの存在として描かれており、青少年は身近な「不良少年」にその姿を重ね合わせていると考えられるからである。

第2に、成人となることへの理解を促す、ということである。かつての日本では、儀式が少年を成人へと誘う上で重要な役割を果たしていた。しかし、近年の成人式の「荒れ」に見られるように、儀式は儀式としての意味をなすことが困難な状況となってきた。このような状況のなか、暴走族マンガにおける更生の物語が、青少年に社会人・職業人としての自立を促す（意識させる）機能をもっているのかもしれない。

このような指摘があてはまるとすれば、暴走族マンガは“自分と異なる者を「異質な者」として排除するのではなく受け入れること”や、“社会人・職業人として自立していくこと”の重要性を青少年に訴える力を持っている可能性がある。もしそうであるならば、学校教育に期待される役割を、ともすれ

ば有害視されがちな暴走族マンガが部分的に担っていると言えよう。

一方、喧嘩の際に道具を使用することを厭わない「こわいタイプ」の登場人物については、逸脱的な側面が際立っているため、彼らに対して共感できない読者もいるであろう。何をするかかわからない「こわさ」を持った者は、自分の安全をおびやかすかもしれない危険な存在だからである。しかし、マンガのなかで「こわいタイプ」の登場人物が家庭的に恵まれていない者として描かれることによって、読者は「こわいタイプ」の登場人物に共感することはできなくても、そのような人物を理解することが可能になると考えられる。“家庭的に恵まれていないことによって逸脱者が生まれる”という物語は、多くの人が「もっともらしさ」を感じることであり、ある種の標準化された物語だからである。このような標準化された物語がマンガのなかに組み込まれることによって、読者は自分が予測可能な世界に生きているという信念をおびやかされることなく、マンガを安心して楽しむことができるのではないだろうか。

ただし、このような「こわいタイプ」の登場人物が青少年に悪影響を及ぼす危険性は、否定できない。「腕っ節の強さ」とは異なり、「こわさ」は「ある一線」を乗り越えることによって誰でも手に入れることが可能である。それゆえ、暴走族マンガの影響を受けた青少年が、周囲から一目置かれる存在になるために、「腕っ節の強さ」を身につけること以上に「こわさ」を身につけることを選択する可能性がある。

このことの問題点を考えるにあたっては、今から10年以上前に起こった事件を手がかりとしたい。1998年1月、中学1年生の男子生徒が女性教師をナイフで刺殺する事件が起きた。当該生徒は、生徒指導上特に問題が見られなかったとされる生徒であったため、“今の子どもたちは激昂すると何をするかかわからない”という意味で『『キレる』子どもたち』という言葉がワイドショーをはじめとする各種報道等で取り沙汰された。また、少年によるナイフ所持が大きな社会問題となり、当時の文部大臣である町村信孝氏は青少年によるナイフ等を使用した事件に関する緊急アピールを出している。

ここであらためて考えてみたいのは、“今の子どもたちのなかには本当に『『キレる』子どもたち』

が多いのか”ということと、“なぜ子どもたちがナイフを所持していたのか”という2点である。仮に、今の子どもたちが暴走族マンガを通して、“何をするかかわからない「こわさ」を身につけることが周囲の者たちから畏怖され、ひいては一目置かれる存在になることにつながる”，というメッセージを受け取っていたとしよう。すると、子どもたちがナイフを所持するのはあくまでも周囲から一目置かれるための戦略であり、彼らは本当に『『キレる』子どもたち』なのではなく『『キレる』子どもたち』を演じている子どもたち』であると言えよう。このように考えた場合、先に紹介したような事件の再発防止のためには、子どもたちに対して基本的な倫理観や規範意識を身につけさせる、といった指導をする以上に、「キレる」人間を演じることが取り返しのつかない結果を招くことになる危険性について指導することが重要であると言えるのではないだろうか。

注

- (1) 『日経エンタテインメント!』(2007年7月号)。
- (2) 朝日新聞(2007年11月16日)。「『金田一少年』、『神の雫』の原作者が株と家族の小説」。
(<http://www.asahi.com/komimi/TKY200711120219.html>)。
- (3) 「少年画報社」のHP
(<http://www.shonengahosha.jp/>)。
- (4) 『オートバイ』2008年5月号および6月号の別冊付録である『日本の名車第1弾』および『日本の名車第2弾』をもとに作成した。表中のバイクは、国産車の中型・大型に限定している。なお、バイクの発売年・値段は型式によって異なるが、表では初期型の発売年・値段を表示している。
- (5) 『疾風伝説 特攻の拓』では、4巻から6巻および8巻から11巻の計7巻の巻末において、主要登場人物が乗っているバイクの改造箇所が詳しく紹介されている。
- (6) 中田朋樹編(2006・2007)、『日本の名車』(2008)、Nostalgic Hero 編(2008)を参考にした。
- (7) シリンダーが4つあるエンジンのこと。シリンダーが多いことの利点としては、エンジンの動きがスムーズとなる、振動が少なくなる、1つあたりのピストンが小さくなる、などがある(米山

2005)。

(8) この点については、境 (2010) も指摘している。

主要参考文献

大久保智生・加藤弘通 2006, 「問題を起こす生徒の学級内での位置づけと学級の荒れおよび生徒文化との関連」『パーソナリティ研究』第14巻第2号, 205-213頁。

大山昌彦 2009, 「暴走族文化の継承」五十嵐太郎編著『ヤンキー文化論序説』河出書房新社, 185-201頁。

境愛一郎 2010, 『暴走族マンガにおける少年の逸脱像の変遷』(富山大学人間発達科学部平成21年度卒業論文)。

佐木飛朗斗 (原作)・所十三 (漫画) 1991, 『疾風伝説 特攻の拓』(全27巻), 講談社。

佐藤郁哉 1984, 『暴走族のエスノグラフィー』新曜社。

田中宏 1989, 『BAD BOYS』(全22巻), 少年画報社。

田中宏 1997, 『BAD BOYS グレアー』(全16巻), 少年画報社。

道路交通研究会編 2009, 『月刊交通』第40巻第6号, 東京法令出版。

中田朋樹編 2006, 『The 絶版車 File 二輪車編 ~1979 空冷4気筒エンジン全盛期』インフォレスト株式会社。

中田朋樹編 2007, 『The 絶版車 File 二輪車編 1980~ バイクブームと呼ばれた時代』インフォレスト株式会社。

『日経エンタテインメント!』(2007年7月号), 日経BP社。

『日本の名車第1弾』(『オートバイ』2008年5月号別冊付録), モーターマガジン社。

『日本の名車第2弾』(『オートバイ』2008年6月号別冊付録), モーターマガジン社。

Nostalgic Hero編 2008, 『ナナマル Bike ヒーロー』芸文社。

Nostalgic Hero編 2008, 『ハチマル Bike ヒーロー』芸文社。

藤沢とおる 1991, 『湘南純愛組!』(全31巻), 講談社。

藤沢とおる 1997, 『GTO』(全25巻), 講談社。

米山則一 2005, 『知りたいことがすぐにわかる

バイクのメカ知識222』山海堂。

D. Matza and G.M. Sykes 1961, "Juvenile Delinquency and Subterranean Values," *American Sociological Review*, vol. 26 (5), pp. 712-719.

D. Matza 1964, *Delinquency and Drift*, John Wiley, New York (=1986, 上芝功博ほか訳『漂流する少年—現代の少年非行論—』成文堂)。

G.M. Sykes and D. Matza 1957, "Techniques of Neutralization: A Theory of Delinquency," *American Sociological Review*, vol. 22 (6), pp. 664-670.

(2011年5月13日受付)

(2011年7月20日受理)

